

テモテへの手紙第二3章10-17節 「困難な時代の働き人」

1A 敬虔にかなう教え 10-13

1B パウロにある手本 10-11

2B 敬虔に伴う迫害 12-13

2A 聖書にある確信 14-17

1B 幼い頃からの親しみ 14-15

2B 良い働きへの有効性 16-17

本文

テモテへの手紙第二3章の後半部分、10節から今晚は学びます。パウロは、3章の始まりで「終わりの日には困難な時代がやって来る」と言って、テモテに教えました。その特徴は第一に、「自分を愛していること」です。神が人を愛し、その愛に応答する私たちが神の愛の中で生きるというものではなく、自分を優先し、自分を大事にして、それで神とキリストを退けるという時代であります。そして第二に、そうした自己愛が「敬虔さを装って、入ってくる」という特徴です。「3:5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」

そして、どれだけ学んでも、その実が結ばれていない現状を書いています。「6 こういう人々の中には、家々にはいり込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、…」これは、時間が比較的余っている女性たちに対して、目に見えることに引き寄せるような教えを吹き込んでいる姿です。今の生活で良い幸せなものがあればよいということで、何か刺激的なもの、楽しいもの、そういったものにおびき寄せる、巧みな教えです。そして、「7 いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。」とあります。終わりの日の特徴は、知的には刺激を与えるものを提供するということです。それが敬虔にかなうもの、実を結ばせるものではなく、ただ知識は教えているけれども、その人を変えないというものがあります。

こうやって偽教師たちは、真理の教えに反対させるようにします。主がモーセを通して、イスラエルの民をエジプトから連れ出そうとする時に、その奇跡を一部真似ることによってエジプトの魔術をする者たちが、その言葉に反対させたように、同じように、「似て非なるもの」を提供して反対させます。あからさまに反対するのではなく、むしろ似たもの、いかにも良いとされているものを提供して、それに対抗させるのです。

1A 敬虔にかなう教え 10-13

このように、困難な時代が来ます。その中で、テモテが教会の牧会をしている中で、その圧力に対して多少なりとも臆病になっていた時に、パウロが励ましの手紙を送っています。彼自身が、今、

ローマの獄中にいて、これから皇帝によって死刑判決を受けることがほぼ定まっている中で書いていました。それで、テモテがしっかりと、自分に任されているものを保っているように勧めているのです。

1B パウロにある手本 10-11

10 しかし、あなたは、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、11 またアンテオケ、イコニウム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。しかし、主はいつさいのことから私を救い出してくださいました。

「しかし、あなたは」とパウロは、テモテに言っています。パウロは主にあつて、テモテには自信があったのです。彼は信頼のおける、主の働き人でした。テモテ自身がその自信がなかったのが問題だったのですが、それで励ましています。

そして、パウロはテモテが彼の受けた困難や迫害を思い起こさせています。テモテは、パウロが牢にいて困難を受けているのを見て、それで同労者までが彼から離れるのを見ていました。おそらく、全体に流れる空気としては、そのような困難を伴う教えに対して魅力を失って、今の流行にそれていったのでしょう。テモテも、自分のしていることが果たして正しいのか、その確信が強い圧力の中で弱まっていたかもしれません。けれども、それは今に始まったことではなく、福音の真理、その健全な教えにはいつも伴っていたことを教えたのです。

ここに、「アンテオケ、イコニウム、ルステラ」とあります。テモテが登場するのは、パウロの第二次宣教旅行においてルステラを訪問した時(使徒 16:1)ですが、その前に既に彼によってキリストへの信仰に回心していたのでしょう。第一次宣教旅行における彼の教え、行動、計画、そして信仰について、思い出させています。アンテオケでは、ユダヤ人たちが神を敬う貴婦人や町の有力者たちを扇動して、それでその地方から追い出しました。それから、イコニウムでは信じないユダヤ人の主張と使徒たちの主張に分かれた状況になって、それでその反対側にいる者たちが使徒たちを石打ちにしようとしてしました(使徒 14:5)。

そして、ルステラでは有名な、「バルナバがゼウス、パウロがヘルメス」にされた事件です。パウロが福音を語っている時に、生まれながら足なえだった男を立ち上がらせたら、そう祀られそうになりました。それでパウロもバルナバも自分の来ている衣を裂いて、天と地を造られた方をあがめるように勧めました。すると、アンテオケとイコニウムからパウロたちを追ってきた人々が、その群衆を抱きこんだのです。それで、こう書いてあります。「使徒 14:19 ところが、アンテオケとイコニウムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。」パウロはほとんど死んだ者とみなされました。ところが、彼は立ち上がって何と、ルステラの町にはいって、福音を語り、さらに人々を弟子にしていきました。

このような迫害の中にありながら、テモテはよく付いてきてくれたのだ、と言っています。具体的に、テモテがパウロの何に付いて来てくれたかと言いますと、こう書いてあります。「私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、」そして、「迫害や苦難」です。テモテへの手紙で一貫して強調されてきたのは、初めに、「教え」です。健全な教えともありました。霊的に健康を保つ教えであり、それはイエスが罪人を救うために来られたという教えであり、そして人々を敬虔にかなう生き方をさせる教えであります。正しい教え、健全な教えがあるからこそ、そこに良い実が結ばれます。テモテは、注意深くパウロが何を言っているかを聞いていき、それに付いてきました。決して、周りの状況や彼のカリスマのような雰囲気に従ったのではありません。自分が困難な状況に陥ったとしても、その困難さで彼の教えの正しさを疑ったりしませんでした。

そして、「行動」です。これは、生き様と言ったらようでしょうか、生活している姿であります。彼は、教えていただけでなく、キリスト者としてどのように生きればよいかを示していました。教理が分かっても、それが言葉だけであれば、それに付いていく人は、どのように適用させればよいか分かりません。それで示していくということがとても必要になります。パウロは、「私がキリストを見なっているように、あなたがたも私を見なってください。(1コリント 11:1)」とコリントにいる教会の人々に話しました。私も、大きな影響を受けたと言えば、もちろん教えもそうですが、その態度であったり、行動でした。アメリカにいた時に、いろいろなことを思い出しますが、レビ記から説教をしている時に、はっきりと同性愛が罪であると伝えていたデービッド・ホーキングがいます。説教をしている時に、壇上に上がってきて説教をやめさせようとした男がいました。彼はとても冷静に対応して、何ら変わることなく説教しつづけました。カール・ウェスタランド牧師は、教会の屋根に上がって、掃除をしなければいけなくなった時、自分の学生たちがいるのに関わらず、顧みずに自分自身が上がって行って、どんどん動いていきました。とにかく、いろいろな小さな場面があります。教えている内容からも大きな影響を受けましたが、そうしたちょっとした行動からも影響を受けました。

そして、「計画」です。これは「目的」と言い換えたほうが良いと思います。パウロが決意していたこと、立てていた志は非常に強く、はっきりとしていました。福音を異邦人に伝え、しかも、まだみことばが伝えられていないところに行き、宣べ伝えました。その結果、あの三回の宣教旅行の道になりました。今ある状況に、ただ反応するような働きをしている者たちが多くいる中で、そうではなく、神の国の幻がはっきりして、そして主から与えられた使命が何かをはっきりさせている奉仕者たちと共にいることは、幸いです。私たちが後に報いを受けるのは、どれだけのことを行なったかではなく、主に命じられたこと、主に語られたこと、主に任されたことにどれだけ忠実であったかです。

そして「信仰」です。困難な中にいれば、それだけ信仰が試されます。目に見える事柄は、神に約束されたことがらと正反対にさえ見える時があるからです。しかし、すべてのことは主から来ていると受け入れ、信じて、主がたつた今も、事を運ばせておられるのだと信じることはとても大切です。パウロは、小アジアにおいて宣教の働きを続けようとしたところ、御霊によって禁じられました。

そして、マケドニヤから助けを求められた人が夜に現われました。そしてギリシヤのアカヤに向けて旅をしました。ピリピ、テサロニケ、ベレヤ、それからコリント、アテネまで行きました。その間、激しい迫害を受けて、逃げるようにして福音を語っていました。全ては前が見えない中で、それでも主が自分たちを運んでおられるという信仰を持っていたのです。

そして「寛容」です。これは、何かを許容するという意味ではなく、英語ですと longsuffering です。パウロは、仕返しでもしたい反対を受けました。しかし、彼は裁きを主に任せました。このように、相手と戦うことを避け、主に任されたことに集中していく忍耐です。それから「愛」です。パウロは、ローマ 9 章において、肉の同胞であるユダヤ人のためなら自分が神に呪われたものとさえなってもよい、とまで祈っています。これほど強烈な愛を、パウロは持っていました。多くの人は、表面的に人によく見られていることが、その人が、愛がある証拠であると見ています。いいえ、その人が罪から解放されて、神のものになり、キリストの恵みによって成長していること、このことを第一に願ひ、そのためには自分の犠牲を惜しまない人です。そして「忍耐」です。これは困難や圧迫中においても、希望を捨てないでいる状態です。パウロが、その模範でした。

そしてパウロは、「何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。」と言っています。けれども、これは自慢しているのではありません。続けて読むと、「しかし、主はいつさいのことから私を救い出してくださいました。」と言っています。自分が受けてきた迫害に彼自身が驚いているのです。それでも、今の彼がいます。つまり、これは主が私を救ってくださったという真実の証しそのものです。そしてパウロは次に、これは自分自身に限った話ではないことを話します。

2B 敬虔に伴う迫害 12-13

12 確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと思ったら、必ず迫害があります。イエスさまも約束されました。「世にあつては患難があります。しかし勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝つたのです。(ヨハネ 16:33)」ここで、私たちの中には、教会の中にさえ誤った考えがあります。「反対をされているのであれば、それは何か私たちのほうで誤ったことがあるのではないか。」ということです。確かに、自分たちの罪や弱さ、欠けによって批判や抗議を受けることがあるでしょう。それは謙虚に受け止めなければいけない。けれども、何かが起こると、悪い意味で「私たちに何か、間違つたことがあるからだ。」と誤ってしまいます。それは裏返すと、「正しく生きていれば、問題は起こらないのだ。」という誤った前提があるからです。問題が起こらないはず、けれども、今、このことを行なえば、困難や反対が起こることは目に見えている。だから、行なわないでおく、という考えがあるかもしれません。それこそが、偽りの教えなのです。イエス様は、「マタイ 10:24 弟子はその師にまさらず、しもべはその主人にまさりません。」と言われました。イエス様こそが、迫害を受け、反対を受け、人間的な目からは失敗をした方でした。問題が起こるはずがないという考えは、主人であるイエス様以上になろうとしているからに他なりません。

迫害は、もちろん私たちは受けたくないものです。それ自体を喜べということではありません。けれども、自分自身が義を行ない、先人の信仰者、何よりも主ご自身に従っていることなのだを確認することができます。そこに喜びがあります。「マタイ5:10-12 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのです。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。」

13 しかし、悪人や詐欺師たちは、だましたりだまされたりしながら、ますます悪に落ちて行くのです。

先に話した、敬虔を装いながら実を否定している者たちの動きであります。テモテはこのことに悩んでいましたが、彼らの姿を生々しく伝えることによって、テモテの心の悩みを少しでも解消させようとしています。悪人や詐欺師は、自分が騙しているだけでなく、自分自身が騙されているということです。デービッド・グジックという、カルバリーチャペル・サンタバーバラの牧師がこのように言っています。「心の動機というのは大事ですが、時にそれだけを強調してしまう傾向があります。多くの悪いことは、誠実になろうとして騙されている人々によって、すばらしい動機をもって間違ったことを行なおうとしている人々によって、もたらされます。そして、人々は彼らのすばらしい心を見て、それでその危険な欺きの行動を受け入れてしまいます。ただ動機だけで付いていくのではなく、それが真理にかなうものなのかどうか、測り知る必要があるのです。¹」

2A 聖書にある確信 14-17

このように偽りや欺きのある時代において、教会の中にも入り込んでいるなかで圧迫を受けていたテモテですが、パウロは、聖書に対する確信を教えることによって彼を元気づけます。

1B 幼い頃からの親しみ 14-15

14 けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、15 また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。

主が教えておられることは、「学んで確信したところにとどまっていなさい。」であります。とても単純なことです。この単純なことを新約聖書は一貫して教えています。使徒ヨハネが第一の手紙で言いました。「2:24 あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるので

¹ <https://enduringword.com/commentary/2-timothy-3/>

す。」使徒ペテロも、第二の手紙で教えています。「3:1-2 愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、これらの手紙により、記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるためなのです。それは、聖なる預言者たちによって前もって語られたみことばと、あなたがたの使徒たちが語った、主であり救い主である方の命令とを思い起こさせるためなのです。」そしてヘブル書では、信者が強い迫害を受けて、ユダヤ教に戻る誘惑を受けていた時、著者は勧めています。「ヘブル 3:14 もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。」

私たちは、二つの偽りの教えに脆弱です。一つは、「これこれをしていない。」という焦りを煽る教えです。「あなたは、これこれのことをしていなかった。だから、リバイバルが来ないのです。」というようなものです。もう一つは、「これこれについて知らない。」という無知を責めるものです。前者は律法主義に傾く教えであり、後者はグノーシス主義、あるいは靈知主義と言ったらよいでしょうか、知識に傾かせる教えです。これらの二つが混合して教えられることはしばしばあります。しかし、私たちに必要なものは、イエス・キリストの恵みです。そして、イエス・キリストの知識です。このことを聖書によって教えられること、これで十分なのです。主に教えられた初めの確信に留まることが最も大切なことであり、これを思い起こすことが最も大切なことです。

「あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており」とありますね。テモテは、すぐに誰から教えられたかを知っています。初めに母と祖母からです。「1:5 私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。」それからもちろん、使徒パウロから教えられました。

特に、母と祖母からの影響や大きく、「幼いころから聖書に親しんで来た」と言っていますね。幼い時に受けた教えであります。終わりの時代、この健全な教えがないがしろにされているために、様々な偽りに陥っているということが分かるでしょう。テモテはおそらく、「これはパウロが言い広めた新種の教えだ。」という圧力を受けていたかもしれません。けれども、そうではなくユダヤ人の先祖から教えられていたものと連続しており、その約束がキリストにあって実現したのだというのが、パウロの教えであったのです。パウロが、ヘロデ・アグリッパ二世の前で弁明する時に、こう言いました。「使徒 26:6-7 そして今、神が私たちの先祖に約束されたものを待ち望んでいることで、私は裁判を受けているのです。私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。」

そして大事なものは、「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」という言葉です。聖書こそが、キリストを信じ、神の救いを与える知恵を与えています。また言い換えると、聖書はキリストを信じ、神の救いをもたらすというご計画、

その知恵を教えているのであって、その目的から外れた教えというのが、偽りの教えへと変化していく第一歩であるということでしょう。

2B 良い働きへの有効性 16-17

そして、聖書そのものに信頼と確信を置いてよいのだという励ましを与えます。

16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です 17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

聖書についての、最も大切な定義ともなる言葉が出てきました。聖書は、神の靈感によって書かれたものだ、ということです。靈感とは、「神の息が吹き込まれた」という意味です。それは、神ご自身の御霊が源となっており、その言葉は神の言葉そのものであるということです。パウロは、聖書そのものが教えることにこんなにも自信を持っていたのは、神の靈感によるものであることを知っていたからです。

ここで誤解がないようにするために付け加えると、書いている人、著述している人々はもちろん人間です。「聖書はすべて」と言っているように、書かれてある聖書に神の靈感があるのであり、書いている人が無欠の人ということではありません。欠けのある人々が書いているけれども、それでも聖霊が導かれているのでそれは神に拠るものであり、誤謬からも守られています。ペテロも第一の手紙で、こう言っています。「2ペテロ 1:20-21 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」ペテロはここで、自分がイエス様に高い山でその栄光の姿を目撃したけれども、それよりも確かな言葉として、預言があると言っています。ですから、彼は自分の体験でさえ、過ちを含む可能性があるけれども、預言の言葉は聖霊によって導かれているから確かなのだ、と言っています。

「聖書はすべて」という言葉も大事です。一部ではなく、全てであります。なぜこれが大事かと言いますと、私たちの知性では神を源としてないのでは？という疑いを持ってしまう箇所というのは、たくさんあるからです。理解が難解な箇所があります。そのような時に、これは神からのものではなく、人が自分の思いで書いたものだとするのは、そして、こんな批判もします。「そういつて一字一句に拘るから、聖書全体に流れる神の心を見失うのだ。」いろんなことを、まことしやかに話すのですが、そこで巧妙に本質的で、根本的な問題に陥っているのです。それは、「だれが人の言葉で、神の言葉であると判断しているのか？」であります。自分自身なのですね。こうやって聖書が一部だけ神の靈感を受けているという人々は、神よりも自分が源となっていることに気づかないといけません。神が最終権威者であり私たちが僕であるためには、聖書の言葉は取捨選択するのではなく、パッケージで全て受け入れないといけません。

そして、聖書は神のことばであるので、有益なことが四つあります。一つは「教え」です。これがテモテへの手紙で強調されている、全ての事柄の初めです。神の真理を教え、正しさを教え、何が正しいのかを教えるものです。そして次に、「戒め」があります。私たちは、聖書に耳を傾けると、神の正しさを知るようになり、そこで自分が神の基準を満たしていないことを知ります。神が正しく、自分が正しくないのです。どの部分が正しくないのかが示されますが、それが「戒め」です。そして、「矯正」があります。聖書を学んでいる中で、自分の欠けたところ、足りないところを知ったら、その自分のあり方を、神のあり方に変えます。方向転換です。そして最後に、「義の訓練」です。これは、いかに、神の正しさの中に生きていくべきか、いかにその基準の中に自分を保っていくかについてです。

ですから、私たちは聖書にある神の靈感を受け入れることによって、自分が変わらぬ神によって、この方に姿に変えられる経験をします。これが、神の知恵であります。そして神が罪人をキリストにあって救う計画にある知恵であります。自分が罪から贖われ、キリストの似姿に変えられるところの知恵です。そして、聖書を読むということは、自己肯定ではなく、自己否定です。自分を否み、キリストと共にいる、キリストに付いていく歩みであります。

そしてテモテに、奉仕者としての励ましを与えます。「それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」と言っていますね。ですから、教えを受けている人々が義の訓練を受けるのに十分なだけでなく、自分自身が奉仕者として良い働きをするのにも十分に事足りる書物なのだということです。これはテモテには大きな慰めであったことでしょう。彼は、「あなたは知らないのだ」という強い圧力を受けていたのかもしれませんが。けれども、そうではなく、聖書そのものが全ての良い働きのために整えてくれるのだということです。ですから、私たちへの慰めでもありますね。私たちが主に仕えている中で、聖書の学びをこのようにじっくりと行なっています。これは、あまり目に見える結果を見ることはできません。とても遠回りしている気分になります。けれども、そうではありません。主によって義の訓練を受け、そしてあらゆる良い働きのために十分に整えられた者となるものなのです。ですから、生活や奉仕において、聖書が十分な知恵を与えてくれ、難しい言葉ですと、「十全」と言います。これだけで事足りるのだ、ということです。ですから、私たちの務めは、聖書が何を言っているかを理解することです。そうすれば、聖書自体が知恵を与えてくれます。聖書自体が、救われるための知識を与えます。